

源氏物語と白氏文集覚書二つ

丸山キヨ子

I 源氏物語の作者が手にした文集は七〇巻本ではなかったか

II 源氏物語すまの巻に与えた白氏文集の影響について

I 源氏物語の作者が手にした文集は七〇巻本ではなかったか

序

源氏物語と中国文学との関連の考察に手をつけた時、その媒体としての中国作品の姿をつきとめるというようなことは、夢にひとしいことと思われた。それで、とにかく目前にある現行作品との関連が考えられれば、それを拾って大体の傾向——どのような作品が最も関連が深い

か——というような事を探り出すより他に方法がないと思われた。

しかし、そのようにしていった結果、関連作品の中でも白氏文集が圧倒的な位置をしめるということを、量質の上で見きわめることができたのと同時に、源氏物語に引用されている文集の語句が、現行の形と異なることに気づいた。そこでこれを検討していったところ、文集伝来の歴史に即してその形が変っていることを見出し、その大体の順序と形態とをつかみうる事が分って、一応の整理を試みた。その結果は、東京女子大学論集第八巻第二号に、「長恨歌から観た白氏文集の系統——源氏物語の引用に徴して——」と題して報告しておいた。論集でも述べておいたように、恵まれたことには、私共は、平安朝の始め、千百余年前の白楽天在世中に、一留学僧が彼の地で写して持ち帰った文集を始めとして、折々に伝えられたその形を、すべてというわけでもなく、又、完全というわけにはいかないにしても、大体順序づけて考える事が出来る程度に伝え残されているのであった。そうと知れば、源氏物語の作者が手にした文集の姿も推定出来るのではないかという希望を懐くようになった。折から、京都大学の人文科学研究所で本格的な白氏文集校勘作業を始められており、それに伴って、白氏文集の現存諸本の整理研究が行われていることを知らされた。それらは、神田喜一郎博士還暦記念論文集（昭和三十一年一月）所収の論文として発表されたのをはじめ、次々と公刊されるようになった。同時に昭和三三年四月から半年に亘って京都大学に内地留学を許されたので、研究所の諸教授および研究員の方々にお目にかゝって、直接教示を受けることが出来、また斯学の權威であられる神田博士にもお目にかかる機会を与えられて、指導に与ることが出来たので、それらの成果や好意ある助言に励まされて、前回の報告に不充分であったことや、訂正しなければならぬことのあるのに加えて、その後考えたこと等あわせまとめてみようと思ひ立つに至った。人文科学研究所の中国哲学文学研究室平岡教授には一方ならぬお世話になったが、文集の批判としては、その方面を特に担当された花房英樹府立大学助教授の名著「白氏文集の批判的研究」（昭和三五年三月刊）、その前身である西京大学学術報告人文・広島大学中国文学研究室支那学研究等に載せられた諸論文に直接教えられる事が大きであった。あわせ記して感謝申上げる次第である。

まずその成果に教えられて前回の報告を補正することから始めて、新しい考察に進みたいと思う。

源氏物語の引くところの白氏文集の姿が、現在大東急文庫に伝っている金沢文庫本文集に最も近く、その奥書に写し伝えられた伝来の年代

からいって、源氏物語の作者が手にしたものとしてはこの系統（系統といったのは他にもこの本文に近い抄本および端本があるからである。詳しくは前掲論文参照）の本文に違いないであろうと考えるというのが前回報告の結論であった。この事は動くものではないが、その金沢文庫本の性格について前回二つの誤を犯していた。その一つは、現存金沢文庫本が、欠巻はあっても大体一系統の本文を代表するものであると考えたことであり、二つには、その奥書からして蘇州南禅院本の写しであろうことは金子彦次郎博士などが言われている通り（平安時代文学と白氏文集、道真の文学研究篇第一冊）であるが、現存金沢文庫本に、その自記「蘇州南禅院白氏文集記」に、奉納した巻数が六七巻とあるにも拘らず、六八巻が存在するということは、七〇巻本の完成時に、あるいは六八巻以後の巻を納め加えたからであろうと推定したことである。この二つのことは、花房氏の詳細を極めた御研究によって、現存金沢文庫本は単純な一系統の本文ではなく、六七巻本であった南禅院本の写し伝えられたものが主になっているとしても、後の七〇巻本、さらに北宋本などをもって補い加えられた複雑な歴史的変遷を経た混成本文であるという御説によって、訂正されなければならないのである。花房氏の御研究は、深い洞察と緻密な考察に依る御成果であるので、門外の者の容易にその要旨を受けて応用させていたとげる様なものではないのであるが、それを踏まえさせていたとかなければ、私自身の問題に到達することが出来ないで、結論だけ紹介させていたと進もうと思う。

一

花房英樹氏は「白氏文集の資料批判と作品整理Ⅰ、Ⅱ」（西京大学学術報告人文）「金沢文庫本白氏文集批判」（広島大学中国文学研究室支那学研究）において「大東急記念文庫に所蔵される諸巻を中心に、東京国立博物館所蔵の林羅山手校本等によって復原される数巻をも加え、金沢文庫本の成立を吟味」されて次のように結論づけておられる。すなわち「金沢文庫本は、現存する諸巻についてみれば、特定の筆者によってある一時期に書写されたものではない」という大矢透博士の説（「仮名遣及仮名字体沿革史料」）を更に敷衍徹底されて、以下の様に述べておられるのである。花房氏が吟味された金沢文庫本は二八巻 六 八 九 一二 一四 一七 二一 二二 二四 二八 三一 三

三 三五 三八 三九 四〇? 四一 四四 四七 四九 五二 五四 五九 六一 六二 六三 六五 六八 の諸巻であるが、先ず巻八、巻三五、巻四九、の一群は後述する諸巻の様に貞永元年(一二三二)書写の奥書がないのを始め、大矢透博士の云われるごとく書体も古く、そののみならず一行の字数、訓点、校語も異り、拠る所の本さえも異った、「古本の旧を存する」もので、貞永写本に先行する本の巻々である事疑うべきものはないと云われている。

次に第二群の貞永年間を中心とした巻々は、これらの拠る所にも各種の本がある。その第一類は巻五四が拠った摺本であるが、それは今日所見最古の宋版本(南宋刊行の紹興本)とは異なる北宋刊本であり、それに菅家証本による校語がなされている。

第二類と数えられるのは上述巻五四の校語に用いられた菅家証本であるが、奥書に寛元五年(一二四九)正月三日借請菅大府卿兼善証本云々とある「菅大府卿兼善証本」である。

第三類に数えられるのは会昌四年の識語があり、それ故に疑もなく惠尊将来の重鈔とみなされている数巻、巻一二 二五 三一 三三 四一 四四 五二 五九である。これらの諸巻は、会昌四年、白居易在世中、惠尊が南禅院で、白居易の奉納した白氏文集を書写した、その流を汲むものであろう。しかし、巻五九の会昌四年の識語の上に「菅本伝」の三字があり、また巻五二の識語の旁註に菅家証本による校語が見られるので、会昌の識語を含んでいた菅家本に拠る一本があり、それを貞永年間に写し、更に菅家証本で対校したものと考えられる。一方金沢文庫本の外にも会昌の識語のある本文があった事が伝っているので、上述の菅家本もこれら惠尊本の系統に属するものであって、これらを越えて貞永本が惠尊本に直接する可能性は殆んどない。このようにして貞永写本における「会昌」の識語のある上掲の八巻は、惠尊本からの直接の書写ではなく、惠尊本を承ける菅家本を、さらに重ねて書写した一群の伝写本に拠ったものである。

貞永写本の第四類は、会昌の識語のない諸巻で、現存するのは、巻六 九 一四 一七 二二 二二 二四 二八 三八 三九 四〇? 四七 (五四) 六二 六三 六五 六八 の一七巻である。この中には「会昌」の識語がなくても惠尊の系統に属するものがあるかもしれない。というのは金沢文庫本以外の資料によって、惠尊が「会昌」の識語のある諸巻以外になお書写していた事が分るからである。そうして「会昌」の識語のある諸巻が惠尊本から出る菅家本をさらに受ける一本に拠っていたように、これらの諸巻もそのような一本に拠ったもの

のである。また菅家本にも「会昌」の識語のないものがあつたことは上述巻五四で、菅家本を用いて補写しながら惠萼の識語について何ら触れていないので知られる。そうは云つても一七巻が悉く惠萼本から出るのではない。それは南禅院本は六七巻で止り、六八巻は存すべくないからである。ところで金沢本は上述「摺本」による校語が頻りに見えており、しかもそれが現在所見の最古の刊本（南宋紹興本）とも異つていたのであつた。かくして貞永写本はこのような惠萼本系とは異なる一本と、上述して来たような惠萼本系の一本を組合せたものであるが、それは貞永写本の時に行われたのではなく、既に両者を合して巻六八をも容れている一本に拠つてゐるものと思われるのである。このように金沢本は複雑な構成をとつていたのであつた。「会昌」の識語をもつ巻もあつたが、惠萼から直接に書写されたものではなかつた。「菅本」という文字が、識語に冠せられていた巻もあつたが、菅家本から直接に書写されたものでもなかつた。惠萼本系に属する菅家本から出る所の一本に、拠るものであつた。（圈点筆者 以下同じ）しかしまた、惠萼本系と異なる一本の一部をも含んでいた。しかも時に欠ける巻があり、他本によつて補われてもいたが、その中には北宋刊本さえ混つていた。貞永写本は、現存の金沢文庫本では広い範圍を占めてゐるが、それに先行する諸本の、例えば巻八のような諸巻もあつた。貞永写本を中心に、その欠巻が他本によつて補写されたのである。刊本に拠る部分を除けば、古い伝統をもつ鈔本を承けるものではあるが、全体としてみれば、金沢文庫本は一系統の純粹な本ではなかつたのである。

ところで一方大江維時の編する「千載佳句」の収載詩篇に徴し、また、「菅家後集」に載せる醍醐帝の御製の原註、都氏文集、江吏部集、日本国見在書目録などの言及に徴して、当時七〇巻本の白氏文集が通行してゐたと考えられるが、これは六七巻であつた筈の惠萼本とは別系統のものであり、惠萼の拠つた開成四年になる南禅院本と、会昌二年編纂の七〇巻本とは、巻六一から六七までの編次が此の様に異つてゐた筈である。

（南禅院本）（七〇巻本）

卷六一 格詩一 文辭

卷六二 格詩二 格詩一

卷六三 律詩一 格詩二

卷六四 律詩二 律詩一

卷六五 律詩三 律詩二

卷六六 律詩四 律詩三

卷六七 文辞 律詩四

金沢文庫本の卷六一は、今はその存否さえも不明であるが、東京博物館蔵林羅山手校本によれば羅山の当時は存在していたのであり、書陵部那波本に見える書入れに、明瞭に金沢文庫本の識語が記され、その校語によってそれが文辞巻であったことが分る。しかも卷六二は、格詩、歌行、雑体の歌詩巻であり、格詩一に相当する巻である。この様にして、金沢本は六八巻が惠萼本とは異なる一本のその巻であると同時に、実は卷六八に限らず六一巻以後の諸巻も七〇巻におけるそれぞれの諸巻であった。このことは、会昌の識語が、現存諸巻およびいま見得る限りの記録で、卷五九を最後としていることにも応じよう。金沢文庫本は、卷六〇以前においては多く惠萼本に承け、卷六一以後は七〇巻本を承けるものである。

金沢文庫本の性格について花房氏は以上のように説明しておられる。

花房氏は更にこの六七巻本と七〇巻本について、「会昌」の識語について考えれば、菅家本は六七巻本に拠る惠萼本を容れていたが、江家本には惠萼の識語があったという記載は見えず形跡すらもうかざうことができない。江家本について知り得るのは七〇巻本のみである。大江維時の「千載佳句」はこの本を中心とし、大江匡衡が「江吏部集」において加点したと記しているのもこの本であった。匡衡は、次のように云っている。

近日蒙綸命。點文集七〇卷。夫江家之為江家。白樂天之恩也。故何者。延喜聖代。千古維時。父子共為

文集之侍読。天曆聖代。維時齊光。父子共為文集之侍読。天祿御寓。齊光定基。父子共為文集之侍読。

江家のこのような立場を支えるのは、菅家が六七巻の蘇州南禅院本による惠蓐本を打出すのに対して、当時全集とも見做されていた七〇巻本を標榜したこともその一であったであろう。とすれば「惠蓐本と七〇巻本との異同は、惠蓐本と江家本とのそれに置換えることも出来よう」といっておられる。もっともその差異は記録の上ではさほど多くはなく、多くない事例の大半も、立釈と訓詁との差に重点があるので「惠蓐本と七〇巻本とは本文においては近接していたのである。恐らくは、この七〇巻本は、白氏の原本からあまり崩れていない一本であったであろう。白居易が七五巻本の『白氏集後記』で『其日本新羅諸国、及兩京人家伝写者、不在此記』という、その『兩京人家伝写者』を承けるものであろうか。もとより蘇州南禅院本のような手定本ではないが、惠蓐本とともに、晩唐から五代にかけての動乱を経て訛誤を含むに至った諸本とは異質である」と断定しておられるのである。

こゝでつけ加えておきたいのは、前掲の私の報告で、「専門家の研究が出る筈なのでそれをまつ」と述べておいた内閣文庫蔵管見抄本白氏文集のことである。管見抄本について、花房氏は左のように述べておられる。「管見抄白氏文集は、最後部に、更に、七〇巻本以後の巻七一および外集としての巻七二が付されており、これらの部分は、景祐四年（一〇三七、日本では後朱雀天皇の長暦元年）の杭州刊本いわゆる北宋本に拠ったものであるが、細かに詩句の検討をしたところでは、これに先んずる部分は、平安時代博士家に伝承されていた古本に拠ったものである」と。先の報告で私は長恨歌をとって比較を試みた時、金沢文庫本と管見抄本では小異がある事を指摘しておいた。この相異が何に基くか未だ充分納得がいかないが、その折、大体において一致しているので金沢文庫本の系統としてあげておいたことが、花房氏の御研究でも裏づけられたので、小異の問題は後に残して先に進む事にしようと思う。

さて、花房氏の云われるように、金沢文庫本の源流に、南禅院本系統の六七巻本と、江家本系統としての七〇巻本が想定されるところならば、そうして、金沢文庫本となる前に既に両者が併せられて一本となっていたとしても、源氏物語の作者と同時代である大江匡衡が、家本として七〇巻本を標榜していたのであるからは、源氏物語の作者の手にした媒体としての白氏文集の姿を考えることは、そう夢のようなことでもなくなったのである。

二一

白氏文集の渡来は、公式の記録として最初であるといわれる、藤原丘守が「元白詩筆」を仁明天皇に奉った時（文徳実録卷三 仁寿元年九月二六日の項）からと考えられているが、それは開成三年（八三八、仁明天皇承和五年）のことであるので、開成四年に成った南禅院白氏文集六七巻が、まだ編定されていなかったことは明らかである。その後約一〇年位の間に、慈覚大師円仁将来の「白氏詩集六巻」や、上述の南禅院本を写した留学僧惠尊による招来本など引続いて盛んに渡来したようであるが、その巻数が明示されるようになるのは時代が少しく下るのである。先に花房氏の御説を紹介させていたとき、既に言及されていたのであるが、陽成天皇の元慶三年（八七九）に四九才で卒した都良香の「都氏文集」の『白楽天讃』に『集七十巻、尽是黄金』とあるのを始め、藤原佐世の日本国見在書目録（八九一―八九七）に「白氏文集七十巻」とあり、また菅原道真の「菅家後集」に昌泰三年（九〇〇）と記される醍醐天皇の「見右丞相献家集」の御製「更有菅家勝白様 從茲抛却匣塵深」の原註に「平生所愛白氏文集七十巻是也 今以菅家不亦開帙」と見えて七〇巻となっている。花房氏も云われるように現在白氏文集の中で、七〇巻本の存在をいうのは、七五巻本の末に付されていた「白氏集後記」を除けば巻七一所収の「醉吟先生墓誌銘序」と「題文集櫃」のみであるので、上掲七〇巻の記載はこれらの詩文によって記されたのではなく、現実の文集の巻数によったものであらうと考えると、醍醐天皇が御手にされたのを始め上述の人々の手にした文集は七〇巻本であった、と、考えられる。

これも花房氏の御説を紹介した時、江家本が七〇巻本の文集であった事にふれたが、それについて花房氏は次の様に説明しておられる。先ず大江維時（八八八―九六三）が編纂した「千載佳句」が那波本に即すると巻六九で終り、那波本巻七一に及ばないこと、しかも、千載佳句は七言の律詩を中心とするから巻七〇以前の七言近体を含む諸巻は悉く採上げられているにも拘らず、七言近体をも数多く収めている巻七一のみに全く無関係である事から、千載佳句の拠る本が「巻七一」はもとより、七〇巻を越える諸巻をもたない七〇巻本である事を推定させるし、また大江匡衡が江吏部集（一一〇一―？）に「近日蒙綸命点文集七十巻」と記して加点をした本が七〇巻本であった事からも、江家本は七〇巻であつたであらうと。これは御説の通りであると思われる。なおそれに加えて、匡衡が「江吏部集」に於て加点の事について「夫

江家之為江家 白樂天之恩也 故何者 延喜聖代 千古維時 父子共為文集侍読云々」と述べているのは「江家のこの様な立場を支えるのは、菅家が六七巻の蘇州南禅院本による惠尊本を打出すのに対して、当時全集とも見做されていた七〇巻本を標榜したこともその一であつたろう」といっておられるのは匡衡が加点した本は江家本ではなくて、綸命によって加点したのであるから皇室の御本であつたのではないかと考えてよいのであろうか。たゞ加点したのが皇室の七〇巻本であるとしても、江家所持の本が七〇巻本であり、それに習熟していればこそ綸命を拝したのであろうから、匡衡の記述からも、江家本が七〇巻本であつた事は察せられるのである。このように考えると、この記事は江家本が七〇巻本であつたことに加えて、前掲の醍醐天皇の御自註とあわせて、皇室御所持の御本が一条帝の御世にも七〇巻本であつたことを証していることとてよいように思われる。

このように記録に明らかなところでは、延喜時代には七〇巻本が行われたようであり、その後も皇室御所持の御本、江家に伝わる本は七〇巻本であつたことがわかる。が、なお、我が国に伝来した文集は、上述のもの以外にも、日本国見在書目録にも別集としては「白氏長慶集二十九巻」ともあり、総集としては「元白唱和集」も録されており、菅原道真の「詠樂天北窓三友詩」（菅家後集）には「白氏洛中集十巻 中有北窓三友詩」とあるように「洛中集」もあつた。そうして、金沢文庫本の校語にも「唱和集」とか「洛中集」に拠るものが散見する由である。（筆者は大東急文庫蔵金沢文庫本を繙読する便宜を与えられたが、特に校語を対象として調査するまでには至っていない）しかし、源氏物語との関係においては、これらの特殊な形を考えるよりも、菅家の系統と考えられる六七巻本、江家で伝えたと考えられる七〇巻本というような全集の形をした文集を対象にすることが、既に「源氏物語における白氏文集受容の概観」（比較文化第六号）でも指摘した事実に即応するように思われるので、この二系統本について考えてみる事にしたのである。

三

源氏物語の作者が菅家本（六七巻本）を手にしたか、江家本（七〇巻本）を手にしたかということは、私ははじめ、これを訓読法によって識

別しうるかと考えて検討してみた。しかし、博士家の点と異った訓み方を見出したのみで、期待したような結論には到達出来なかった。このことは、更に追求してみるつもりであるが、その前に、別の面から一応の臆測を提出してみたい。

「源氏物語に於ける白氏文集受容の概観」でも観てきたように、源氏物語にみられる文集の引用は那波本で五八卷迄しかない。それ故確実なことは五八卷までしか分らないのであるが、言及であげた「北窓三友」(すゑつむ花二〇二の八——ページ数は源氏物語大成本による——)が七〇巻本の六二巻所収の詩であり、また「偶吟」(はゝき木四六の五)は六九巻所収の詩であるのに問題を覚えるのである。もっとも、はゝき木の巻、雨夜の品定めで馬頭が女性観を大いに語る場面で用いられている、「つながぬ船の浮きたるためしもげにあやし」という表現は、下に踏まえる何物を考えなくても一応解釈は出来るのであって、背後に何か考ええるとしても、諺程度のもので一応済むであろう。しかし、他に多くの文集の詩句を踏まえた表現を指摘される事を考えると、白氏文集「偶吟」を背後におくことによって、作者の意企を、より深く理解できるならば、これを考える方が妥当ではないかと考える。一体にこの箇所は古くから典拠が考えられていたのであって、伊行の釈では「倭漢朗詠集」「無常」の題下に収められる唐の詩人、嚴維(朗詠集には羅維となっており、柿村重松氏の考証によって今、この様に訂正しておく)の作

観身岸額離根草 論命江頭不繫舟(みをくわんずればきしのひたひにねをはなれたるくさ、いのちをろんずればえのほとりにつながざるふね)を典拠とし、定家の自筆本奥入等まで引き継がれている。この詩句は、和泉式部がその訓読の一字を歌の頭にすえて、四十三首の歌としている所から(和泉式部集二)当時の訓読法を知りうる詩句として有名なものであり、それだけに、一見拠りどころとして相応しいようであるが、命のはかなさを述べている所と、物語の表そうとしている方向と、意味の上で相当のずれがあるようである。それに着眼してか「河海抄」ではこれを斥けて「然而其心与物語相違する也、詩者以は無常に譬たり、物語は浮船の心也」として「文選」賈誼「鵬鳥賦」の「泛乎若不繫舟」をあげ、その莊子を引いた註をも指摘して「予以管見勘得之」といっている。この句は泛(うきたること)という語も備えていて「浮きたるためし」にも符合しまことに相応しいようであるが、死生を超えた達人の形容としてあるので、やはり物語の内容に即応しない恨がある。ところがこの所に白樂天の「偶吟」を典拠としてあげたのは他ならぬ宣長の「玉の小櫛」であった。一体宣長は引歌ということも最

少限度に止めようと主張した人で、典拠ということを嫌い、特に中国文学との照応などということに関しては、徹底して否定的であったことは周知の通りである。にも拘らず、特にこの所では「河海に文選を引かれたるは本也。然れどもこゝは白氏文集の偶吟の詩に、無情水任方円器不繫舟随去住風といへるをとりて書る也。さてげにあやなしは、この本文にかゝりていへり」と積極的に打出しているのである。このことは注意に価すると思う。「偶吟」は花房氏の繫年配列によれば、会昌一年長安での作で、それは、翌二年致仕して白氏文集七〇巻を編纂する前年であり、長い人生を振り返つての感慨に、なお自適の心易さを詠じたものである。それ故「不繫舟随去住風」も閑散な老官の身の安さを述べているのであつて、文選の鵬鳥賦などよりはるかに人間臭を漂わせたものになってきているのである。もちろん物語の、女の手の内を逃れた夫の放縦さといさゝか距りがなくはない。しかし前掲二つのものに比べると、ひそかに踏まえられた典拠として、転用されていたとも考えられなくもないように思われるのである。

この様にして、もしもこの詩が踏まえられていると考えるならば、作者の手にした文集は六七巻を越す六九巻の詩も入っていたわけであり、七〇巻本であろうかと考える証拠を消極的ながら、一つだけもちえたと云えるであろう。

四

源氏物語の作者を紫式部とすると、その漢詩文の教養を培うのに与つて力あつたのは父為時であろうということは、既に常識の範囲に入っている。そうして、白氏文集に関する開眼も父為時を通しての誘掖があつた事を思う時、為時の手にした文集の形態が問題になってくるように思われる。

私は次に為時の詩に見られる文集の影響から、その手にした文集を推定してみようと思うのであるが、その前に、為時の影響が、源氏物語の作者にどのように及んでいるか指摘しておこうと思う。もっとも、この事は、金子彦次郎博士が「平安時代文学と白氏文集 道真の文学研

究篇」の中で既にふれておられることであるが、所見に異なるものもあるので一言ふれておきたいのである。源氏物語すまの巻に文集卷一三の「冬至宿楊梅館」の詩句に言及して、次のように云っている所がある。

うちかへりみ給へるに、こしかたの山は霞はるかにて、まことに三千里の外（すま四二三の一〇）の心ちするに、權のしづくもたへがたし（すま四二三の一〇）
すまに退いた源氏の君が漸くかの浦に着いて、こし方を顧みての感慨である。これは「十一月中長至夜 三千里外遠行人 若為独宿楊梅館 冷枕單床一病身」の第二句を踏まえた表現であるが、これが源氏物語に言及される前に、既に為時によって

雪飛千里外

胡塞嘶花遙去馬。巴山歌月遠行人。（新撰朗詠集 卷下 雜雪）

と応用せられていたのであった。金子博士はこれを「源氏物語五十四帖の素材や表現の中、古来白氏文集の詩文と関係ある箇所として指摘をされ、認容もされている百二十余項のそれらと（中略）為時の詩歌中へ引用摂取された詩文におけるものとの、共通性・類似性について仔細にこれを比照点検するに、其の相共通せるものとしては僅に、右の一箇所だけしか見出せないの、源氏物語作者の異説として紫式部の父為時参与説を否定する傍証としてみたい」といっておられるのであるが、私は為時参与説を否定することにおいては金子博士と同感であるが、源氏物語に関連ある白氏文集の詩の中で、多くは千載佳句、倭漢朗詠集、などと重なる関連詩の中で、それらの何れにも見出されず、ただ父為時の詩にのみ用いられているこの詩を、それ故に親しんでいて、作者が念を入れて制作したと思われるすまの巻に、巧に織込んでいることを、むしろ父為時の影響をうけたたしかな証拠として見ておきたいと思うのである。

さて為時の作品として現在数えられている漢詩が二〇首ある。本朝麗藻一三首、類聚句題抄五首、新撰朗詠集一首、江詩抄一首である。これらの詩篇のうち、本朝麗藻、類聚句題抄の計一八首だけについてみても、白詩句又は白詩句に基づく句題、又高積善の「夢白太保」詩に唱和した詩の如きものが混じ、その敬慕の念の如何に激しかったかが察せられるが、今、金子博士の「平安時代文学と白氏文集 道真の文学研究篇」に従って、白詩の詩句、詩題に基づくものを拾ってみると、関連あるとみられるもの一〇首に及び、関連箇所の指摘されるもの三九箇

所に及んでいる。所でこの関連箇所が指摘される白詩の収載巻数をみることは、為時の手にした文集を彷彿せしめるものであると思うので調べてみると、金子博士は後代の編定本の巻数をあげておられるので一卷から七〇巻迄の諸巻に亘っているとしておられるが、為時当時の文集と考えられる前後集本七〇巻本の巻序に直してみると一卷から七一巻にわたる事になる。金子博士の指摘せられた為時の詩句の、白詩の詩句・詩題に関連あるとせられた箇所は、殆んどそのまゝ認められると思うのであるが、ただ一つ問題が見出される。それは、金子博士は三七巻とせられ、前後集本では巻七一に該当する詩句との類似である。金子博士が指摘されたこの七一巻所収の詩句との関連がもし認められるとするならば、為時は七一巻本を見ていた事になるので、延喜以来、匡衡等に至るまで七〇巻本が行われていたという花房氏の御説にも響いてくる。そこで他の詩句については金子博士の「平安時代文学と白氏文集 道真の文学研究篇 第五章藤為時の詩歌と白氏文集」を参照していただくとして、問題の詩句のある箇所だけをこゝにとり上げることにする。

門閑無謁客

藤為時

家舊門閑只長蓬。時無謁客事条空。翟公去尉塵長息。袁氏安貧雪不通。草合園生秋露白。苔封扉帶夕陽紅。久忘倒履送迎礼。

別作洛中泰適翁。

本朝麗藻卷下 閑居部

この為時の詩の最後の一聯における「倒履送迎礼」は文集の

勿聞扣戸醉吟声 不覺停盃倒履迎、

共放詩狂同酒癖 與君別是一親情

編定本卷三七
前後集本卷七一 喜裴濤使君携詩見訪醉中戲贈

の「倒履迎」から来ていると金子博士はされるのである。為時の詩の「倒履」は、古典全集本、群書類従本および金子氏所引のもの、皆「履」になっているが「倒履」というのは用例が多いが「倒履」という形は佩文韻府にも出ていなかった。「履」でも意味はなさない事はないと思うが、そのような成語があったか否か分らない。恐らく為時の誤か、其の後転写、印刷の際の誤が伝わったものと思われるが、金子博士はこの形で関連を考えておられるのである。為時の「門閑無謁客」の詩は他にも多くの白詩句を含んでいるが、それは今は問わぬ事にして、当面

の倒屣迎の三字について云うと、金子博士の関連ありとされる「喜裴濤使君携詩見訪醉中戲贈」の詩は、花房氏の「作品繫年配列」（白氏文集の資料批判と作品整理Ⅱ）によれば、会昌四年七三歳洛陽での作とされる。明瞭に七〇巻本の外の作品である。処でこの「倒屣迎」の語は、金子氏も註に於て断つておられるように、もと魏志王粲伝に

蔡邕才学顕著、貴重朝廷、常車騎填巷、賓客盈坐間 粲在門 倒屣迎之、日此王公孫也、有異才、吾不如也

とあるのから出ているのであって、白詩をまたずとも多くの用例のある語なのである。試みに佩文韻府を繙いたところが、「倒屣迎」の語では、為時所見の可能性あるものでも、旧唐書劉蕡伝、張南史詩、司空曙詩があり「倒屣」のみではその他にも散見する。しかし、当時流行して、為時が手にしたと思われ影響も受けたであろうと思われる「千載佳句」所収、王維の輞川別業に「倒屣」の語を検出する事も出来るので、これをもって考えると、文集七一巻所収の裴濤使への贈呈詩は、金子博士のいわれるように為時の詩に影響を与えているとは必ずしも断言しえないのであって、王維の詩をもってその関連を考える方が、むしろ妥当ではないかと考えられるのである。そのように考えると、為時が七一巻本をみていたという事実は消失するのであり、七〇巻以内の詩との関連のみが指摘される事になるのである。

金子博士の指摘されたうちで上述の影響関係を指摘すべきでないと思われる七一巻の一詩を除くと、編定本下巻から七〇巻迄に亘る影響関係の指摘出来る詩篇を、これを当時行われていた前後集本の巻数になおすと次のようになる。（算用数字は関連箇所を表す）

一巻 1 二巻 1 五巻 1 六巻 1 八巻 2 一一巻 1 一二巻 1 一三巻 1 一四巻 1 一五巻 1 一六巻 2 一七巻 4 一八巻 1 一
九巻 3 二〇巻 3 五一巻 2 五二巻 1 五四巻 3 五五巻 1 五六巻 1 六一巻 4 六三巻 1 六四巻 2 六五巻 3 六六巻 2 六七

卷2

詩歌篇からの影響が圧倒的に多いことが見られる。（但し例外的に注意されるのは、巻六一 文辞篇から四箇所も関連箇所を指摘できる事であって特徴的である）

為時の詩に影響関係の指摘出来る詩巻が六七巻までであるという事は、これを南禅院本系の菅家本に近いと認めるべきであろうか。しかも為時は菅原文時の弟子であるという（源註拾遺）。しかし、それはまだ問題が残されていると思うので次に眼を為時の交際圏に向けて考えてみたい。

上述為時の詩が最も多く残されている「本朝麗藻」は具平親王を始め、一条天皇の寛弘盛時の詩壇を反映した唯一の詩集であるが、上巻は残闕で五二首、下巻一〇二首、計一五四首が収められている。その最高は正暦四家の一人大江以言二〇首、次いで後中書王具平親王一八首、儀同三司藤原伊周一六首、その次が藤為時で一三首である。続いて、左金吾藤原頼道一首、藤有国一首、それから源孝道、編者の高階積善等が各七首、一条帝の御製六首、以言と同じく正暦四家の一人江匡衡は二首ということになっている。尤も江匡衡は自撰と思われる「江吏部集」を残しており、それによって彼及び江家に関しての詩文は多く知ることが出来るのであるが、藤為時の詩が「本朝麗藻」にこれだけとられていたことは、当時の詩壇における位置を考える上で注目しておいてよい事実であろうと思われる。勿論上巻闕卷の部分に案外為時の詩が含まれず、残った部分に多いということも考えられようし、「和高礼部再夢唐故白太保之作」の詩題が示すように、編者との一段と接近した関係が収載詩を多くしたようにも考えられるが、それにしても、詩そのものに於ても、大同小異ながら、匡衡の詩などよりより詩的感覚は見えていたようである。所で江吏部集をみてゆくと次の様な詩が発見された。

餞越州刺史赴任

鏡水蘭亭君管領

翰林李部我艱辛

明時衣錦昼行客

暗牖彈冠晚達人

司馬遷才雖漸進

張車子富未平均

越州便是本詩国

宣矣使君先遇春

この詩の越州刺史は誰であろうか。江吏部集に収められた詩で年代の明らかなものは早いもので一条帝の永延三年五月（九八九）遅いもので寛弘七年三月三〇日（一〇一〇）遷丹州刺史云々）其の間正暦、長保のものがまゝ見られる。日本文学大辞典山岸博士の江吏部集の解説によれば寛弘七、八年の頃に成立したものであろうかといわれ、寛弘九年七月一六日（この年二月二五日改元、長和元年となる）に六一才で卒しているの、最大限に考えて寛弘八年の作も収められる可能性があるように思う。所で匡衡がこの様な詩を贈る可能性のある人物を考え、大

日本史国郡司表で、越前、越中、越後の守に任じたものを拾いあげてみると、具平親王を囲むグループに属す詩人官吏では、藤為時の「寛弘八年二月任」という事実が先ず思い当たるのである。国郡司表によれば同じグループに属する紀斎名が長徳三年七月権官として越中に任ぜられた事が知られるが、本朝文粹「表」によれば斎名・匡衡は文章生の推挙のことで再三争っているし、長徳三年では彼も又越前の権守に任ぜられているので詩に見る様なゆとりある気持は出てこないであろうと考える。ただ同表によれば寛弘七年三月、源孝道が越前守に任官していたようであるが「見」とあるのみである。

これは御堂関白記寛弘七年三月三〇日の条に、「越前国守孝道死」とあるのに拠ったものと思われ、更に調べてみると御堂関白記寛弘四年四月二八日の直物で越前守に任ぜられているのが見える。孝道は前に述べた本朝麗藻の有力な詩人で道長をめぐる一人として、為時などと全く同列であり、本朝麗藻寛弘三年東三条邸の花宴に於ても為時と並んで詩を賦して奉っているのである。このようにみてくると越中刺史が、為時か孝道かということは仲々決定しがたく思われてくる。先ず匡衡との関係をみても江談抄第五詩事の項に「匡衡送書於行成大納言許云。為憲。為時。孝道。敦信。挙直。輔尹。此六人者 越於凡位者也。故共甘貧云々」とあって為時・孝道共に称揚されているようであり、又上掲匡衡の詩に云われている「明時衣錦屋行客」という詩句も、為時はその岳父の藤原為信の任地、越後守になっていたのであり、孝道はその祖父源満中の任地越前守になっているので両者共にその対象になりうるのである。寛弘年代、すでに父親からの関係がある、越前・越中・越後の守に任じた人で、老令であり、匡衡と相当相許するような関係にあった人ということになるのである。孝道は寛弘七年に歿しており、寛弘六、七年の頃に成立？の本朝麗藻中で、自らすでに、「孝道老年前吏」と云っており、また為時も、岡一男氏（「源氏物語の基礎的研究」）によれば「何か莊園関係の事故でも起きて、老体に鞭って出掛けたものと思れ」「それが余程危険を予期しての慌ただしい出立であったことは惟規の歌でもわかる」と云われているのである。このように容易に甲乙をつけかねるのであるが、一つには任期が為時は二月、孝道は四月で「遇春」の文字が為時の場合にふさわしいこと、更には孝道と為時とは白楽天への私淑の度が為時の方が、顕著のように思われるのである。匡衡のこの詩が擬しているのは元白の交友における白楽天の左の詩の気分である。すなわち

元微之除浙東觀察使喜得杭越鄰州先贈長句

稽山鏡水歆遊地、犀帶金章榮貴身、官職比君雖校小、封疆与我且為鄰、郡樓對翫千峯月、江界平分兩岸春、杭越風光詩酒主、相看更合是
何人

また

答微之誇越州州宅

賀上人回得報書、大誇州宅似仙居、厭看馮翊風沙久、喜見蘭亭煙景初、日出旌旗生氣色、月明樓閣在空虛、知君闌數江南郡、除却余杭
尽不如

これは長慶二年杭州刺史に任じた白樂天が、同三年越州刺史に任じた元稹を隣州に迎えて、互に悦んで贈答した時の詩、前後集本白氏文集五
三卷所収の詩である。匡衡の「鏡水・蘭亭」の出所であると共に気分的に多く負うているものと思われるので、匡衡の詩を贈られる相手は、
白詩に憧れ、匡衡の詩を元白の気分をもって受取れる人でなければならぬ。道長をめぐる詩人グループの一人として、為時も孝道もその点
人後におちない自信をもつ人々であろう。しかし、本朝麗藻下に「和高礼部再夢唐故白太保之作」という詩をつくり、その詩の処々に文集の
詩句を鏤てそれに追隨しようとした為時は、今見る所では孝道よりも一步先んじているようである。この場合もし岡氏の云われる様に、為時
が老令(岡氏の推定年令では匡衡よりは五才上である)に鞭って出かける壮途を送り慰めるものとすれば、誠に似つかわしいといえると思う。
勿論共に受領と云っても匡衡は一世を風靡する学者であり、為時は詩人学者と云っても、せいぜい左大臣道長家のお抱え学者にすぎない。こ
のような交りにおいて文集を借覧、或は筆写させてもらえたのではなかったであろうか。もしそうだとするならば、為時の手にしえた文集は、
また江家系統の七〇巻本であったと云えると思うのである。因みに為時は長徳二年正月越前守に任ぜられたと云われている。その時の逸話は
古事談・十訓抄などに有名であるが、その時は年令も若く、しかも殆ど同時に匡衡も越前権守に任ぜられていて上掲の様な詩は贈られる筈は
なかったのである。ただし、このことを思ってもう一度考えられることは「明時衣錦昼行客」の一句は、かつて越前守であり、再び越後守と
なった為時を指していると考えられるかも知れないということである。

この様にみでると、父為時を通して、写しを伝えられたか、手ほどきをされたかの文集も、六七巻の菅家本よりは江家系の七〇巻本と考

える方が妥当のように思われてくるのである。そうして先に述べた源氏物語の関連箇所から考えた七〇巻本推定の根拠とあわせ考えると、より強力な傍証となりうるのではないかと思うのである。

もとより紫式部の仕えた関白家には文集も又書架を飾っていたであろう事は疑を入れない。しかし、式部が彰子中宮の女房として招かれた時にはすでにその文才・学才を認められての事であろうから、召出される前の教養として文集に相当親しんでいた筈である。それで文集の入手経路としては、道長家を考える必要はないであろう。むしろ高階家の女流文学者としての高二位の女の定子が、その才氣と伶俐な頭脳とで一条帝の身边に魅力ある存在として時めいていた側面から——清少納言はその余光を仰いだのではないであろうか——それに代ってより魅力ある存在にならねばならなかった彰子の女房として道長がえらんだのが、嘗て道長をしても乳母子の源国盛にその任国越前を譲らせなければならなかった逸話をもった為時の女であり、その文才・学問的造詣の深さの故に選ばれたものではなかったかと思う。因みに現存の御堂関白記で白氏文集に関する記載を拾ってみると、寛弘三年一〇月、七年八月、同十一月、長和二年九月、長和四年四月で、五ヶ所ある。寛弘年中のものは宋商曾令文が持来った文集を受入れているようであるが、五臣註文選と並列され、後に新たに二千余巻の書物と共に棚厨子を造って収め、更に一条大宮の御所が新造された時、天皇に奉ったのがそれではないかと思われる。この三箇所に記載されている文集は、或は花房氏方の云われる北宋刊本ではなかったかと思われるふしが多いのである。次に長和年間の記載は入宋僧寂照の弟子として来朝した宋僧が持参した文集で明らかに摺本文集と記されている。所でこの宋本摺本が北宋本であるとするならば、寛弘年代に既に日本にあったのであるが、道長の家で珍重されたように当時はむしろ尊いものであったのであろう。しかし、この宋版本はすぐには日本の作品に影響は与えなかったといわれる。花房氏によれば当時の宋本は、大版の立派なもので、文字も当時一流の人の手になるものであり、写本の読みにくさに比較して余りに堂々たるものであったので、そのために本国では読みにくい写本が却って駆逐されたのだそうである。しかも日本では花房氏が考証しておられるように、行成所見本などにも摺本の影響は見られない。それは家学の盛んな日本において、伝統が厳しく重んじられた故の現象であった。こゝでもうひとつ消極的な傍証になるものが考えられる。それは源氏物語の現存最古の註釈と目される伊行（行成五世の孫）の「源氏物語釈」から定家の「奥入」に至る迄、典拠として引く所の文集の詩句がすべて古鈔本のそれと一致することである。そのことに関して注目され

るのは、その典拠として多数の詩句を示している定家の奥入、特に第二次本といわれる自筆本である。巻数まで書入れてある故に、前後集本としての文集の面影を彷彿せしめて興味ある存在である。京都博物館に保管されている定家自筆奥入第二次本は、展覧中にケースの外でしか見る事を得なかったが、幸に源氏物語大成資料篇に収められているので、これで調べたところ、本文の古体であることが源氏物語所引の詩句と符合するのみならず、訓点迄付されていて興味津々たるものがある。

さらに巻数を記した所では、柏木に引かれた「予与微老而無子……自嘲」という詩については「文集五十八 自嘲詩云」とあり、末摘花に言及された「北窓三友」については「北窓三友 文集六十二 三友是也」とある。しかしこの六二巻に「北窓三友」が収められているこそ、花房氏のいわれる七〇巻本であって、定家はまさしく七〇巻本で「源氏物語」を註していたのであった。紫式部と定家とその隔りは二百年近く、文集成立と紫式部の隔たりとはほぼ同じ位なのであるが、伝統を重んじた当時であって、源氏物語と七〇巻本の文集とは並び伝えられたと考えてよいのではなからうか。ところで訓点の上で、既に「源氏物語に於ける白氏文集受容の概観」で指摘した処であるが、てならひの巻所引の「陵園妾」に於て、「松門到曉月徘徊」を「月に」と送ってある。「月（が）徘徊す」と物語で読ませているのにも拘らず、訓点の伝統の固まりつゝあった当時として気がつかれずにおかれたものと思う。

ともあれ、定家が、それをもって源氏物語を註して問題を感じなかった七〇巻本文集が、定家の手に、源氏物語と共にあったということは、源氏物語の媒体としての文集を、七〇巻本の姿において考えることを、側面から支持するように思われるのである。

以上の考察で、源氏物語の作者が手にした文集は、延喜以来、宮中と、博士家のうちでも特に大江家の家本として行われていた七〇巻本であらうかと思われることを、余り積極的な証拠ではないが、源氏物語そのものの徴標により、また、物語作者の父為時の詩にみられる影響関係、および大江匡衡と為時との交友関係などから、大江家の七〇巻本の為時の手に入り易いことを考え、考証してみたのであった。それは、延喜を少しくさかのぼった頃、文集の巻数が始めて記されるようになった、都氏文集、田氏家集、日本国見在書目録などに「文集七十巻」とあるところから、七〇巻本であったと最初から断言されるむきもないではないが、匡衡の時代にさえ、七〇巻本を標榜しているのであるか

ら、やはり一方には菅家本としての六七巻本もあったものと思われるので、出来るだけ物語作者の近辺を洗い出してみたからである。而してこのように復原して考えるのには二つの理由がある。すでに「長恨歌から観た白氏文集の系統（源氏物語の引用に徴して）」で述べておいたように、一つには、源氏物語に引用された文集の詩句が、現行のそれとは異り、六七巻本乃至七〇巻本のそれとびったり一致すること、二つには、現行の文集の巻序は、南宋で大改篇されたその形を伝えているので、源氏物語との関連詩の分布の状態などをみる時に、どうしても改篇前のそれに依る必要があるからである。このような理由から、源氏物語と文集との関係を比較文学史的に見る為には、是非とも平安時代以来の七〇巻本に復原して考察する必要があるということを主張したのである。もっとも、金沢文庫本にしろ、管見抄本にしろ、それは天下一の貴重本であって容易に繙読しうるものではない。それには一つの便法があるのであって、収載詩数に多少の出入はあるが、朝鮮を通して伝えられ、江戸時代に刊行された那波本白氏文集、およびそれを中国で版にした四部叢刊本、および最近中国文学古籍刊行会で版にした白香山集は、古い巻序に従った七一巻本であるので、巻序においてこれを代用し、字句の異同については、冒頭に紹介した花房氏の「白氏文集の批判的研究」の作品繫年において、金沢本、管見抄本に有無を調べ、それぞれの原本によって調べるならば、大体の復原は可能なのである。なお源氏物語大成七巻所収の定家の奥入第二次本に引く文集の詩句は、文字も古体を存しており、前にも述べたように巻序も七〇巻本と一致しているのであって、これによっても大体は察せられるのである。源氏物語作者が手にした文集が七〇巻本であるということを特に注目したのは右のような理由があったのである。

註一 宋代に後人の手によって編纂しなおされた白氏文集で、巻第三八

までが詩篇、巻第三九から巻第七一までが文辞篇になっている。

註二 白楽天が自ら編纂した形を残している白氏文集で、はじめの五〇

巻、後の二〇巻統後の五巻の順序で収められている。

Ⅱ 源氏物語すまの巻に与えた白氏文集の影響について

源氏物語と白氏文集との関係を、源氏物語の作者が手にしたであろう文集の形——それは覚書Ⅰで述べたような七〇巻本であると思われる、現存本としては、小異はあるにしても大体、金沢文庫本や管見抄本の七〇巻迄の部分に彷彿される姿であるが——で考えてみるといくつかの注目すべき事項が浮び上ってくる。それらのうちの或るものは既に「源氏物語における白氏文集受容の概観」でふれておいたので、本稿は、それにつけ加えたく思うもう一つのこと、すなわち、文集の中でも、白楽天が江州司馬であった時代の作品を、比較的多く採用している、という事について考えてみたいと思う。源氏物語に関連のある詩題を通観すると、関連詩四四篇（文集の詩篇という時には、長恨歌伝が一篇加わるので四五篇となる。）のうち江州司馬時代の詩は一〇篇ほどある。これは比較的多数を占めている諷諭詩一四篇に次ぐ数であって、注目すべきことと思われる。文集の中でも、江州司馬時代の作品が特に深い関心を示されているのには、幾分時代の好尚が反映していることも考えられなくはない。一時代前に編纂された「千載佳句」に採られた文集の詩題を、巻毎に調査整理された、金子彦次郎博士の「平安時代文学と白氏文集 句題和歌と千載佳句研究篇」をみると、江州司馬時代の作品で充されている巻一六、一七の詩が、特にという程ではないにしても可成採られており、中でも巻一六は比較的多く採られている方に入る、ということ等が思い合わされるからである。「千載佳句」のこの傾向は、「枕草子」においても受けつがれているようで、関連ある文集の詩として数えられるもの、詩題にして一篇ほどある中で、最も活々と用いられているものに有名な「琵琶引」を始め江州司馬時代の作品が多い。そうして、これもまた「千載佳句」の影響下にあると思われるのであるが、源氏物語の作者の父、藤原為時の現存する詩で文集の詩に関連をもつものをみると、やはり巻一六、七などの作品が比較的多く省られているのである。この様に文集の中でも江州司馬時代の作品が好まれたのには理由がなくはない。江州司馬時代の白楽天は、左遷さ

れたとはいえ、齢も四〇を越え、人間的にも落着きを得て来た時代であるのに加え、時の上官、江州刺史に好遇せられ、経済的には支えられながら、司馬という閑職の故に繁雑な公務からは解放され、都を離れた土地ではあっても風光の美に恵まれた江州で、いさゝかの不満はあっても、詩人らしい生活を送る事ができ、詩作に専念出来たのであった。それ故、その任期の四年間に、凡そ五百篇程の詩がつくられ、詩人としての面目が発揮出来たよき時代(?)であったからである。このような時代に作られた詩として、たまたま「千載佳句」の編者に好まれた詩は平安中期の人々に受けつがれたので、源氏物語の関連詩に江州司馬時代の作品が多いということは、時代の嗜好を反映している点も、たしかにみられるのである。しかし物語における関連の仕方には単にそのみには止っていないものがある。物語作者のこれらの作品に対する眼は、この伝統的傾向から開かれたには違いないのであるが、更に独自の歩みを進めたものが認められる。すなわち「千載佳句」が律詩の対句のみを載り出して採っている傾向を伝えて、後につゞく「枕草子」などは、その他のものとしてポピュラーな「琵琶引」などしか採っていないのに対して、物語作者は、「草堂記」というような文辞篇まで応用しており、また関連詩を拾ってみると、その時代の白楽天が辿った道程を輪廓づけることが出来るような態度で、これを採用していることが知られるからである。作者は、切れ／＼の詩としてそれを享受したのではなく、作者の運命を辿り、生活をなぞりこの一時期の詩人の姿を活々と心に描きつゝその詩を味っていたのではないかと思われるふしが見られるのである。そのことは、すまにおける源氏君の創造にいくばくかの養いとなっているのではないかと思われる。このように考えて思いついたまゝを摘記しておこうというのである。

一

はじめにも少々ふれたように、江州司馬時代というのは、詩人白楽天にとって一時期を劃する時代であるが、この時代の彼が辿った道筋――それは彼の詩を辿ることによって可能であるが――を瞥見しておくことは、源氏物語との関連を理解する上に、更にはすまの巻における源氏君の姿を検討する上にも必要であると思うので、簡単に試みることにする。^{註一}

元和十年（八一五）八月、四四才の白樂天は江州司馬として、長安の都を東南に隔ること三千里の潯陽に赴任しなければならなかった。理由は、その六月三日、武元衡（時の宰相）を刺した賊を捕えんことを即日上疏して請い、越権の責によって左遷されたのであった。当時、彼は、太子左贊善太夫という、皇太子補導の任にあったが、その職を解かれ、位一等を下げられて、詔が下った即日、長安を去らねばならなかったのである。当時地方に下る官吏のためには、旅程に應じて準備の日数を与えられるのが常であるということであるが、それも許されずに出発したのである。その為彼は妻子を携える用意が整わず、単身出発して十日程の里程である商州に到り、商州驛館で三泊して、遅れて来る妻子と落合ったのであった。商州からは漢水の上流に出て、漢水に沿って襄陽に至り、郢州、鄂州を経て大江に入り、これを下って潯陽に至った。長安から襄陽まで車行、襄陽から舟行、長安から五十数日の所を、曰くでは風に阻まれて十日ばかり滞在したので、六十数日かゝっている。江州に着いたのは十月であった。出発を詠じた詩、望秦嶺を過る詩、商州を発する詩などを始めとして、途中舟行の詩は多く文集巻一〇、一五などに収められている。江州に着いた白樂天は、時の江州刺史崔使君に快く迎えられ、左遷された者としては思いがけず恵まれた生活が始った。官舎に住い、日出に出勤し、正午には退庁するのが日常であったが、二年後香爐峯下に草堂を営んだからは、理解ある上司の計らいで、半ばはそこに閑居することが出来た。潯陽は、前は大江に臨み、後ろに香爐峯を控えた明媚な土地であったので、詩囊は肥え、時に任期の五年（通常は三年で近くに移すというのだそうであるが、実際は五年であった。白樂天の場合は、三年数ヶ月で忠州刺史に転じている。）を思つて焦慮し、不満を洩らしたこともあったが、大体においてその生活に甘んじていたようである。その生活を描いた詩は、主として巻六、七、一六、一七に、また江州司馬庁記、草堂記などの文辞篇は巻二六その他に収められている。

彼が忠州刺史となつて転出したのは天和十三年十二月、四七才の冬であった。先にも述べたように、彼はこの間約五百篇の詩を作ったが、その傾向は、彼がそれ以前に長安にあつて作つた諷諭詩、新樂府五十首、秦中吟十首などとは異つた、閑適詩が多かつた。もちろんこの時も諷諭詩を全然作らなかつたわけではない。それは僅かだが巻一、二に収められている。彼の唯一の詩論である「与元九書」（巻二八）も、江州貶適第一年目天和十年冬に書かれている。また長恨歌と共に彼の代表作とされる長篇「琵琶引」（巻一二）はその翌年、天和十一年（八一六）に成つており、草堂記と共に草堂経営の悦びと楽しみとを述べた一連の作品は、草堂の落成した天和十二年（八一七）に作られているのである。

江州司馬時代の白樂天の生涯と、制作活動とを右のように辿り、源氏物語における関連詩の中からこの時代のものゝ詩題を拾ってみると物語作者が、いかに彼の流寓時代の輪廓をつかんで、その詩を応用しているか分ると思う。明らかにそれと分る引用では卷一六の「庾樓曉望」(律詩)卷一七の「十年三月三十日、別微之於澧上、十四年三月三十一日、夜過微之於峡中、停舟夷陵三宿而別、言不尽者以詩終之、因賦七言十七韻、以贈、且欲記所遇之地与相見之時為他年會話張本」(律詩)の二首であるが、その他、文集の巻を追うてみれば、卷一〇、夜聞歌者、宿鰲州(感傷)、卷一二、琵琶引(感傷)、卷一五、廬侍御与崔評事為予於黃鶴樓置宴、宴罷同望(律詩)、卷一六、香爐峯下卜山居、草堂初成、偶題東壁(律詩)、同上、重題四首(律詩)、官舍問題(律詩)、卷一七、薔薇正開春酒初熟、同招劉十九張大夫崔廿四同飲(律詩)、卷二六、草堂記(文)である。もっとも、これらの詩は物語の所々に用い方を異にして鏤められているのであるが、今一つ一つ検討してゆく事は当面の問題を余りに外れるので、この内、卷一六、一七、二六の諸篇がすまの巻に集中して用いられている事を注意して、先に進みたいと思う。「千載佳句」に収載されているものと、そうでないものとを交え、収載されているものも、その採用詩句を違えて用いるなどの考慮が払われて、以上のような、白樂天の江州貶適の生活を一通り辿りうるが如き詩篇を駆使し、特にすまの巻に司馬在任時代の詩を集中して用いたこの方法に端的に示されている作者の手法から、先に一言ふれたように、すまの巻の源氏君の姿に、白樂天の江州司馬時代のそれがいくぶんなりとも影を落していないであろうかと考えるので、次にすまの巻の内容を検討することによって、この仮定をどの程度に満足させられるか試みてみたい。

註一、以下白樂天の江州行の部分の考察等においては、立命館大学教授
授布目潮風氏の「白樂天の官吏生活——江州司馬時代」(稿本)
古稀 記念 東洋学論叢立命文学第一八〇号 一九六〇・六)を参考に

させていた。ここに記して感謝の意を表させていた。く。
註二、註一の論文に同じ

二

日本古典全書本ですまの巻の占める頁数をみると一二〇〜一六四で、四四頁である。その中で、すまに到着以後、すまでの生活を記した部

分は二五頁で、全体の敘述の五七パーセントを占め、前半一九頁四三パーセントは京における別れの敘述となっている。まず巻頭離京の理由と、行先がすまに定められたらしい事を暗示して、三月廿日余りに京を発った由が記され、すま行か決行されたことを述べ、これを序のようにして、なお暫く溯って親しい人々との別離の状からこまどまと敘され、それからすままでの生活に移ってゆくのである。京の別れと、すままでの生活とを私は區別した。それは、私の究極の関心がすまにおける生活にある故に、敘述の分量をあらかじめ測定して示したのであるが、当面の問題として、すまの巻を通じて、源氏君に関する敘述をみる上でも都合がよいと思われるからである。源氏君の心境を中心にみる時、前半、後半、その何れにも通じた三つの側面が抽出される。その一は、前半の部分では、先に京における別れの敘述と云いえたのでも分るように、まず左大臣の邸を訪れて暇乞をすることから始めて、花散里の訪問、朧月夜内侍との別れの贈答、入道宮藤壺と、故院の御陵と、東宮とに詣でての暇乞、紫君と共に過した最後の一日など、その大部分が別れの悲しみを写されていることである。中に二条院の一切の権限を、紫君に託す實際的の場面もないではないが、別れ難い人々との別れが涙多く語られているのである。しかしこうした抒情性の濃い敘述を貫いて、繰返し主張されているもう一つの側面がある。それは「罪なくして」という主張であって、しかも罪なくして退かねばならぬ運命を甘受するという態度において述べられているのである。最もはっきり表わされているのは「とある事もかかる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、言ひもてゆけば、ただ自らのおこたりになむ侍る。（中略）濁りなき心に任せてつれなく過し侍らむものと憚り多く、これよりおほきなる恥に臨まぬ先に世をのがれなむと思う給へ立ちぬる。」という左大臣への、また、「過なければ、さるべきにこそかゝる事もあらめと思ふに」という紫君への挨拶に表わされていると思うが、この場合「濁り」「過」という言葉で表わされているのは、左遷を余儀なくされる刑法上の罪科のいみである。これは最後まで否定し通されている。しかし一方ではその様な無実の罪によって、退かねばならぬ運命において、かくれたところに働く因縁として、源氏君とその対象となった女性との、当事者だけにしか分らぬ結びつきに自覚された罪、それ故に倫理的な、内面的な罪も意識されていたのであった。源氏君は、それを、朧月夜との関係では「罪のがれ難う侍りける」といひ、入道宮を訪れては「かく思ひかけぬ罪にあたり侍るも、思う給へあはする事の一ふしになむ、それも恐ろしう侍る」といつている。そして、それは、心から怖れられ、このような罪を胎む運命のゆえに託せられた東宮の後見を全うしえないことを恐れて、進んで運命を開拓すべく、身を退いてすまに逃れ、

精進潔斎して「かくうき世に罪をだに失はむと思す」ようなそうした罪の意識であった。東宮との関係に於て、一度公に罪せられるならば、再び補左はなし難い。表向きは「さしてかく官爵を取られず、浅はかなる事にかくづらひてだに、公のかしこまりなる人の、現さまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに他の国にもし侍るなるを、遠く放ち遣すべき定めなども侍るなるは、さま異る罪に当るべきにこそ侍るなれ。濁りなき心に任せてつれなく過し侍らむいと憚り多く、これよりおほきなる恥に臨まぬ先に世をのがれなむと思ふ給へ立ちぬる」と左大臣に述べられている通りであらうけれども、藤壺への述懐にみられる次の言葉「惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさば」の憤しみがかくされてあったことは見逃せないと思われる。かくして、その姿の大部分を別れの悲しみにおいて描かれながらも、表面は罪なしとする強い主張と、内に秘められた罪——それは宿世という見えぬ糸に操られているけれども、しかしその故に秘められなければならぬものとして、倫理的にも負目ある、精進によって断ち切ってゆかねばならぬと自覚される罪——に対する自覚と、三つの側面に於て、源氏の心境が描かれていることを注意したいと思うのである。

京の別れが涙多いものであったばかりでなく、すまの生活もまた別れた人々を偲び、便りを交わす度ごとに、あふれる涙をなすすべもない姿で描かれている。先ずすまに到り着いて、来し方を振り返った折の感慨に沈む涙、すまの館に落着いて、行末を思う涙に始って、間もなく訪れた五月雨の季節から、秋冬、春と四季にあてた敘述は、その折々の景物に催されて、思い出の涙にひたっているのである。源氏君のすまの生活の大部分を占める抒情性が、このようにして折にふれての感傷、涙もろさに相当濃く色づけされていることは否定出来ないであろう。しかしこの抒情性に対しこれと絡み合いながらも、時にこれを压えるが如く極立って描かれているものがある。それは前半で内に秘められているといった罪、罪の存在としての我を自覚して、これを断ち切ろうとする精神に於て描かれている姿である。それは源氏君の涙が極つては、最愛の人をこの浦へ迎えようと焦慮させるその瞬間にも「なぞや、かくうき世に罪をだに失はむ」とその心を翻えさせ「御精進にて、明け暮れ行ひておはす」と描かれているのを示すことによって明らかであろう。宰相中将の訪磨の折にも「念誦の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり」と、その視線を投げられずにはいらぬ、大きな要素となっているのである。もっとも、「こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れ給へる御さまにて『釈迦牟尼仏弟子』と名のりて、ゆるゝかによみ給へる」姿態、「涙のこぼるゝをかき拭ひ給へる御手つき、くろきの御数珠

に映へ給へるは、故里の女恋しき人々の心、みななぐさみにけり」という、一種の頽廢をも藏さないではなかったけれども、前半で一言ふれておいたように、東宮に災の及ぶ身の拙なさを、行い勤める事によって、拓り開かんとする意志は確固たるものがあつたのであり、その姿は、悲しみに沈むそれを更に一段と深めている事を読みとらなければなるまいと思う。これらに對してもう一つの姿態「罪なくして」の意識が、後半でもはっきり主張されている事が看取される。それは訪れた宰相中将との別れに詠んだ歌の「われは春日のくもりなき身ぞ」また三月朔日、上巳の祓に詠んだ歌、それはそれによって神に感応させ、明石に導かれる緒を開いたとさえ思われる歌であるが、その「犯せる罪のそれとなければ」という言葉にもはっきり云い切られている罪なしの意識である。このことは、次のあかしの巻に導かれて、明石入道の祈念を打明けられた時、始めて「横さまの罪にあたりて思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつること、今宵の御物語に聞き合はすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ」と、源氏君と一緒に読者もまた一応解きはぐされたかの感を懷かされるのであるが、それは更に明石姫君誕生の折、思い合わされた宿禰の言葉に連り（みをつくしの巻）、わかな下巻の住吉詣にまでも連る、物語構想上の大きな縦糸の一本として理解すべき、源氏の宿世なのであらう。

罪なくしてすまの生活を余儀なくされたことが、かく宿世の一つの現れとして受取られるべく用意されている一方、東宮に災を及ぼさないようにと慎まれ、それゆえに精進にはげませた宿世は、一方が開放的上昇的に用意されているのに對して、源氏君自身に自覺されている限りにおいては下降的であつた。それはそれ故に深さを持ち、すまの生活にあつても、源氏君を一際目立って前向きにさせており、凛々しくも見せたものである。而してこの宿世觀は、源氏君の生涯を貫いて、先の宿世觀を蔽い、物語全体の構成において人間存在の基底に横るものとして敘述されているものである。

このようにみると、すまの巻に描かれた源氏君の精神的姿態は、抒情性を内容とする物語の世界の要求において、別れの悲しみを描きつゝその奥に、昔物語の約束としての主人公の輝かしい運命と、更にそれを蔽う源氏物語作者の人生觀に支えられた有限者として自覺されるべき運命を負うた姿とが互に絡まりあいつゝ展開されているとみる事が出来るであらう。そうして、それらは源氏物語のようなロマンには必須の縦糸だったのである。

作者は抒情詩として物語に別れの悲しみを盛込み、未だ本当に挫折されては将来の展開に差支える源氏君の沈みの時を、罪なき事を主張させて傷つく事から救い出し、そうしてその下に、人間存在の真の姿を自覚しうる深みある人間造型をなして、その怖れを自覚させたのであった。物語の味と、筋の展開の可能性と、深みとをこの様にして獲得しているのである。源氏物語の一帖としてのすまの巻が果している役割は、一応これで充しえていると考えられる。しかし、すまの巻の源氏にはこの他にもう一つの姿態が描かれている。それは上にあげた三つの側面の何れにも関係しつつ、何れからともみ出している部分である。それは分量としてはごく僅かであるが見逃しえないのである。

三

すまの巻に見られる源氏君の姿として、特に注意されるものは、流謫の光源氏の自覚した安らぎの姿である。それは無実なるにも拘らず、そうした生活を余儀なくされた不当に対する悲しみがあり、而も無実であるが故の落着きがあり、運命の破れ目をかいまみたものの慎しみがああり、先に数え上げた三つの側面に重なる部分は相当多いのであるけれども、しかも、それらの何れからともみだしてくる、また何れにも偏らない落付きがのぞいているのである。左遷の史実は既にいくつもあった。つい近い時代に、伊周の生々しい現実があるのである。物語そのものが、行平の名をあげ、道真の故事を指示して述べてさえているのであるし、暗示を拾い上げてゆけば、中国で周公旦、屈原、王昭君など、自ら退いた者、追放されたもの、異郷に嫁がせられたものなど様々である。それ故に「河海抄」には源高明といわれ、つゞいて「花鳥余情」には藤原伊周、小野篁まで引合いに出されたのであった。作者はどうしてこんなに多くの人々を匂寄せたのであろうか。それは恐らく左遷人の雰囲気をかもし出したかったからであろうと思われる。史実は確かにあった。しかし、現実には悲慘目を蔽わしめるものがある。けれど、物語の中には、それはとり入れられてはならないのである。写実物語であっても、そこまで徹底させては、物語が物語でなくなるのである。作者が道真をはっきり表に出したのは、人々に最も同情せられた、それだけに悲慘のにおいが濃い故に、ことさらに、似て非なる姿として打出す為であったのではなかったであろうか。「道真のような」という時には、一方に「しかしそれではない」という意味がかく

されていないであろうか。そのいみで作者はわざと道真を出したのではないであろうか。行平も。しかしこの方には史実が余りに伝わっていない。(源氏物語の当時は分らないけれども。)高明や、伊周はその人と指される事を最も警戒したのではないかと思われる。もっとも、もしも天暦の頃を目ざして物語が書かれたとするならば、これらの人々の未だ存在しない時代として、当然ふれられないでいるのかも知れない。作者はこゝで「左遷」を文学しなかったのではないであろうか。

高潔な文化人には必ずあるもの、世に容れられない孤高、しかもそれが実の罪を負う故であったならば悲惨この上もない挫折になってしまふ。悲劇性をはらみつゝ、無実の罪ということで救われ、しかも悠々対処する姿として示されているのである。左遷を文学する姿、具体的には白楽天の江州司馬時代の作品こそ、そのイメージを描かせるのにもってこいのものではなかったか。周公旦には文学性が薄く、屈原や王昭君では悲劇性が濃すぎるのである。白楽天にしても、その詩を称して白俗という評をうける通り、地方官出の汲々たる官吏でしかなかった。江州においても悟りすましたような事を云いながら、それは無理な諦念による自得として、一方に憤懣の情抑制し難いものがあつたに違いないと見るむきもある。^{註一}

しかし、当時、文集の詩が截り開いてみせた自適の生活の一面は、はじめて具体的に描かれた左遷文学として、魅力の多いものではなかったであろうか。実罪といつても、上奏の越権を非難されたのが理由となつたこの左遷において、しかも文化人としてこれを克服した姿が跡づけられる。源氏君にみられる文化人としての流寓の人の姿は、そこに現われていないであろうか。それは、源氏君の心がにじみ込んでいる筈の持物や、住居や、衣服に現わされている。それは一つの好みとして自由な選択の許された場合でないこの折に、敢てえらびとられたものであつた。それは自ら身を退くにしても、あくまで主体的な退く者のイメージに貫かれた落着きをもっている。物語の中で、流謫の人を描いて、只の感傷性の他に、これほどの落着きと、身構えとをもつて身を退きうる人間の造型をなした事は、源氏君をもつて最初とするのではないであろうか。

さてその持物についてはこのように敍されている。

かの山里の御住処の具は、えさらずとり使ひ給ふべきものども、ことさら装ひもなくことそぎて、またさるべき書ども文集など入りたる

箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。所狭き御調度、はなやかなる御装ひなど、さらに具し給はず。あやしの山がつめきてもてなし給ふ。

(すま 一四、数字は古典全書本段数を示す。圈点筆者)

その住居のさまは次の様に敍されている。

垣のさまよりはじめてめづらかに見給ふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住ひ、やうかはりて、かかる折ならずば、をかしうもありなまし、と昔の御心のすさび思し出づ。 (すま 二三)

これは源氏君到着の際のすまの館の描写である。これは予め用意されてあったものらしく源氏君はそこに迎えられたと見られるのである。

住まひ給へるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵に書きたらむやうなるに、竹編める垣し渡して、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。(中略) 取り使ひ給へる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁雙六の盤、調度、彈棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。 (すま 四五)

右は宰相中將が、周囲の重くるしい空氣を押し切つて、源氏君を訪れた時の印象である。ここに来ると、迎えられた住居は、源氏来住の折の恐らくそのまゝであつたであらうけれど住みなした源氏君の心によつて、はるかに活々とその狀況を印象づけるものになっている事に注目されるであらう。そうしてそれは「唐めいたり」とさえ云われているのである。またその折の衣服についても次のように記されている。

山がつめきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫うちやつれて、ことさら田舎びもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。

これらはすべて、配処にある人の、謹しみとのみとれるであらうか。それは出発前に「『位なき人は』とて、無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを著給ひてうちやつれ給へる」(すま一一)などというのと一脈通じた側面をもつと共に、流謫の境涯に安んじた姿の摘出として、この時にはこの時の理想性を打出したもののよう思うのである。源氏君に描かれた理想像の一つに、流謫には流謫の折のイメージがあつたことを、そうして、それは物語作者の始めて創出した姿であつた事を、それは流謫に際して見られる忌わしい実人生の葛藤を排除し、むしろ孤高に住う態度をさえ持たせようとしている事を見るのである。そうして、それは、白樂天の江州司馬時代の作品から描かれる、白樂天像として、

物語作者に享受されたものではなかったかと思うのである。流謫に際しての、葛藤の描写としては、史実よりは源氏物語のすまの巻に、より影響されているとされる、栄華物語の伊周配流の際の描写にしても、そこには可成人間世界の煩らいが描かれている。それら流されるものの抵抗を一切去った源氏君の姿——それは自ら身を退くという健気さにおいて描かれるという事で、大勢は決せられていると見られはするが——それはやはり作者のイメージによって創造されたものであるからである。なお云うならば、第一、流寓の人を描くということが、流寓を文学とする事が、文集に刺戟されているのではないかと思われる。

すまにおける源氏君のこの姿は、その心理の直接の描写よりも却って側面からこれを描いている部分に現れている。すなわち、源氏君の自適の姿を評してこれをそしる弘徽殿太后の言葉に察せられるのである。

あはれなる文を作り交し、それにつけても世の中にのみめでられ給へば、後の宮聞し召していみじう宣ひけり。「公の勤事なる人は、心に任せてこの世のあちはひをだに知ること難うこそあなれ。面白き家居して世の中を誇りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」などあしき事ども聞えければ…… (すま 三七)

というのである。また、宰相中将を迎えた折の姿を描いては

終夜まどろまず、文作り明し給ふ。 (すま 四五)

と敘されているのでも知られよう。すまの巻で、源氏君の作った詩は一つも載せられていない。事実はいさゝか詩を吟誦している姿においてしか描かれていないのである。にも拘らず、このような敘述の一度ならず見られるというのは、作者の懐く源氏君の姿に流謫の詩人の風貌が濃く反映している事を示しているのではあるまいか。

ところで上にあげた持物、住居などについては、白氏文集の司馬時代の詩に、その範をみうるのであって、一四段の敘述には、白楽天が、香爐峯下の草堂落成の折に、そこに携さえたものを記した「堂中設木榻四、素屏二、漆琴一張、儒道仙書各三兩卷」(草堂記)とあるのが想起されていることを、また、宰相中将の目に印象的に写った住居のさまは、草堂落成の際に題した律詩に「五架三間新草堂 石階松柱竹編牆」(香爐峯下新卜山居 草堂初成偶題東壁) から来ていることも指摘されるのである。

私は前に、源氏物語の関連詩が、草堂落成の折の詩を中心に、江州司馬時代の作品が、その折の白樂天の生活を彷彿させるような仕方多くとられていることを、その中心はすまの巻にみられることを指摘しておいた。折にふれて源氏君の口ずさむ詩に、また源氏君の生活敘述のそここゝにそれらの詩の雰囲気が挿まれているのである。

表面に現れてそれと指摘出来るものをあげるならば

枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに

遺愛寺鐘欹枕聴 香爐峯雪撥簾看 (重題四首)

酔ひのかなしみ涙そそぐ春の盃のうちと諸声に誦し給ふ。

醉悲灑淚春盃裏 吟苦支頤曉燭前 (十年二月廿日……)

などがあり、もう少し奥にひそめられているものでは次のようなものがある。

離京直前、帥宮、三位中将などの訪問に、鏡に向われて、自ら衰えた姿に感慨にふける所は「対鏡吟」(巻一七)で身の衰をなげく詩に、

院の御陵に暇乞に詣でられた折の感慨は「李白墓」(巻一七)で曾て驚天動地した人の死して空しい事をなげく詩に、また始めてすまに家居

して摂津の国守の好意を受けることは「初到江州」(巻一五)に江州に至って刺史崔使君に迎えられた詩に、すまの生活のつれづれに屏風に

絵を描くことなどは「題詩屏風」(巻一七)に符合する。これらは云うまでもなく、それによって描いたというのではないのはもとより、その符合を云々することにも異論はあろうと思うけれど、流謫の人の心理を貫く感慨として、行為として抑し沈められている事をみる時、

暗合としても興味深いものを覚えるのである。私は、むしろ、すまの巻の源氏君のイメージにながしかの参与をしているであろうということとを指摘したいと思うのである。

なお江州司馬時代の作でないものとしては、すま到着の際に遙かに京をふりかえり「まことに三千里の外の心地するに」と敍されているところに「冬至宿楊梅館」(巻一三)が、八月十五日の月に吟誦された詩の「二千里外古人心」には「八月十五夜 禁中独直对月憶元九」(巻一四)が想起されており、また「いとど心づくしの秋風」にもよおされる心には「暮立」(巻一四)、舟のゆく沖を眺めやる耳に聞える雁の声

には「河亭晴望九月註九八日」(五四卷)の発想に通ずるものと思うのである。

註一、平安時代に於ける白居易受容の史的考察(上大田次男)

史学第三十二卷第四号

註二、対鏡吟 卷一七

間、看、明、鏡、坐、清、晨、多、病、姿、容、半、老、身、
誰、論、情、性、乖、時、事、自、想、形、骸、非、貴、人、
三、殿、失、恩、宜、放、棄、九、官、推、命、合、漂、淪、
如、今、所、得、須、甘、分、腰、珮、銀、龜、朱、兩、輪、

註三、李白墓 一七卷

采、石、江、辺、李、白、墳、遠、田、無、限、艸、連、雲、
可、憐、荒、壠、窮、泉、骨、曾、万、驚、天、動、地、文、
但、是、詩、人、多、薄、命、就、中、倫、洛、不、遇、君、

註四、初到江州 卷一五

潯、陽、欲、到、思、無、窮、東、亮、樓、南、湓、口、東、
樹、木、調、疎、山、雨、後、人、家、低、濕、水、煙、中、
菰、蔣、餞、馬、行、無、力、蘆、荻、編、房、臥、者、風、
遙、見、朱、輪、來、出、郭、相、迎、勞、動、使、君、公、

註五、題詩屏風絕句并序 卷一七

十、二、年、冬、微、之、猶、滯、通、州、予、亦、未、離、湓、上、相、去、万、里、不、見、三、年、
鬱、相、念、多、以、吟、咏、自、解、前、後、辱、微、之、寄、示、之、付、殆、數、百、篇、雖、藏、篋、中、
永、以、為、好、不、若、置、之、坐、右、如、見、所、思、是、掇、律、句、中、短、少、麗、絕、凡、一、

百首 題録合為一屏風 举目会心 参若其人在於前矣 前輩作
事多出偶然 則安知此屏不為好事者所伝 異日作九江一故事爾
因題絕句聊以獎之

相憶采君詩作障 自書自勸不辭勞

障成定被人爭写 從此南中紙價高

註六、冬至宿楊梅館 卷一三

十、一、月、中、長、至、夜、三、千、里、外、遠、行、人、
若、為、獨、宿、楊、梅、館、冷、枕、單、床、一、病、身、

註七、八月十五日夜 禁中獨直 对月憶元九 卷一四

銀、台、金、闕、夕、沈、沈、獨、宿、相、思、在、翰、林、
三、五、夜、中、新、月、色、二、千、里、外、故、人、心、
渚、宮、東、面、煙、波、冷、浴、殿、西、頭、鐘、漏、深、
猶、恐、清、光、不、同、見、江、陵、卑、濕、足、秋、陰、

註八、墓立 卷一四

大、抵、四、時、心、緒、苦、就、中、腸、斷、是、秋、天、
黃、昏、獨、立、仏、堂、前、滿、地、槐、樹、滿、樹、蟬、

註九、河亭晴望 九月八日 卷五四

風、輕、雲、頭、斂、煙、銷、水、面、開、
晴、虹、橋、影、出、秋、鴈、聲、來、
那、靜、官、初、罷、鄉、遙、信、未、廻、
明、朝、是、重、九、誰、勸、菊、花、杯、

四

「源氏物語序説」において阿部秋生氏は、源氏のすま遷行を、何故にすまでなければならなかったかを追求されて、民俗学の貴種流離譚の枠をもってゆかれ、水辺に漂泊して受くべき貴種の試練の時代を考える事によってはじめて解決されるとしておられる。私もまた貴種流離譚の枠の働をみとめ、源氏物語の背後にもまだ力強く働いている古物語伝承の枠を思わせられるものであるが、前者が作者をふくめた読者の要求による制約とするならば、文芸作品の系譜としてその肉づけに際して、作者の心をひいたものはむしろ、屈原の伝説、更にいきいきとした姿としては長安を出発して漢水の上流から大江に出で、潯陽に至った白樂天の江州での生活、前は江にのぞみ、後には香爐峯をひかえ、国司に優遇されて、左遷の者の焦りを感じつつも、なお、詩作にふけることによって自適の生活を満喫した白樂天にその姿の一たんを借りていと云えるのではないかと思うのである。そうして、その姿は、菅原道真の謹慎の姿に最も近いようであるが、むしろ行平の風流に惹かれてゐるようであり、その地が風光明媚なすまである事、歌枕であること、京から水路到達出来る水辺の地であった事などの点で、すまに限る事を思うのである。作者がすまを選んだことには、貴種流離譚だけでは片付かない文学的要請があるのではなかったであろうか。それは貴種流離譚の話の飾りではなしに、むしろ積極性をもった作者の創造の世界にふさわしい舞台であったと思わざるをえない。

物語の全構想に参与するこの沈滞の時代が単に沈みの時代であり、明石君にめぐりあうことだけを充せば足りるのであったなら、始めから、明石の一偶に到着してもよかったのではなかったであろうか。すまの一年の生活を描きたかったのは、文化人源氏君の理想性の一つに、安らぎの心境をもって流離の境地にある源氏君の姿を造型したかったからではないであろうか。すで一言ふれた精進の生活が、源氏君の運命を開いたようににはよみとれない。それはみそぎの折の「罪なくして」という憤りが歌となって進み出た時に、天も感応するかの如く、突如として起った嵐の為に天地震動し、折も折明石入道の明石への招待となっているからである。それは運命の縛を断つ仏の力というよりは、祓の折といふ、嵐といふ、また入道の祈や夢との照応からいっても住吉の神に開運の道を与えられているようであるからである。神仏混合の時代ではあ

るが、精進を仏が嘉し給うてというようにはもっていかれていない。専ら無実の罪をはるかす住吉の神の靈驗であるように受取れるのである。この時代が沈みの時、謹しみの精進のためにだけ描かれてはいないと思われるのである。

源氏君の姿に始めてみられるこの悠々自適の姿に、平安中期を迎えて、藤氏、それも道長が一世を蔽う時代となって、先祖以来の文化人としての嗜みをもちつゝも世に容れられず、満されない思いを懷いていた人々の、世を超越した生活が、兼明親王、具平親王を始め、ぼつぼつ出で始めていた時代であったこと、それは後一条天皇の寵臣、源高光の孫、源顕基が「罪なくして配所の月をみん」(江詩抄)、といった時代には少し早いけれど、敏感な作者がいち早く感じとった隠遁生活の雲囲気を形象化したものととれないであろうか。それは晋書にいう竹林七賢人としても、既に学び知っていた事ではあり、いままさにという感もなくはないであろう。しかしそれはそれとして、物語中の理想的人物の理想性の一つとして源氏物語に始めて描かれるようになったのではなかったであろうか。また竹林の七賢人はもとより、白楽天その人でさえも、一方では閑適を楽しんでいたような姿勢のみられるものゝ、それが政治に強い執着をもつ故であったのであり、特に白楽天などは復官をまちあぐねていた俗吏であったといわれているのをみる時、中国における姿が理想的であった、模された白楽天が模すに価する人物であったからというのではない。抒情文学の物語の世界に、挿入された一抹の清新さを指摘したのである。そしてそれは既にみてきたように、心構えとして住居に、調度に、衣服に、そして時に態度に現れるものゝ、一つの思想として位置づけられるほどにはなっていないことが忘れてはならないであろう。すなわち政治に対する執着、またそれ故の白眼をもともなっていないからである。

私は先に鏡をみて感慨にふけること、源氏の墓参のこと、国司に迎えられたこと、屏風に絵を描いたことなどが、文集の詩と符合する事をあげておいた。しかし事柄として符合するこれらの一つ一つが物語に処を得させられる時には、巧みに物語の中にとけこまされて、物語の世界を豊かにこそすれ、異質のものゝ挿入として異和感など微塵だにない事を付加しておかねばならない。鏡をみて衰えを知る感慨はまさに白楽天のそれであるが、紫上との唱和において、「鏡の影となつても離れまい」といふ、「みても慰もう」といふ、むしろ愛情の媒介に用いて、活かされている。また桐壺院の墓参における感慨は、白楽天の李白の墓に詣でたそれと同じであるけれども、あらかじめ入道官を訪れて「御山に参り侍るを、御言伝や」という心遣いは、まさに物語にしか見出されぬ濃やかさである。そうしてまたすまに到着した折に歓迎した国司は

「国の守も親しき殿人なれば」と説明を加えられて、貴族である源氏君の現実にぴったりと即応させているのである。この殿人は只こゝに顔を出すのみで殿人としての活動はどこにもしていない。この事実は明らかに、白楽天の江州到着の折の刺史の歓迎をふまえているにも拘らず、この説明の挿入によって詮索の糸をたち切った別世界に変えているのである。

摂取の巧みさを示す例は右にみたのであるが更に洗いたてゝみれば、影響の跡の拭いがたい例も見受けられる。

先に宰相中将の訪れた折の源氏君の衣服が「ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣指貫うちやつれて、ことさらに田舎びてもてなし給へるしも云々」と敍されている事を摘記しておいた。ゆるし色の衣が、黄味の勝った薄紅色の下着であろうという事は諸註に従うが、上着である狩衣と指貫とが青鈍であった事に注意したい。この青鈍は、琵琶引に「江州司馬青衫湿」とあるのを始め「約心」（巻七）に「青袍塵土浼」とある青衫・青袍に関連がないであろうか。白楽天の正式の官名は「将仕郎守江州司馬」であり、将仕郎は文散官を、江州司馬は職事官を表しているであつて、青衫・青袍は、その将仕郎（従九品下）の官服を表しているのだそうである。^{註一}「故実叢書」服飾の項によれば狩衣は色の好みは自由である由であり、一方「源氏物語事典」によれば、青鈍一四例の内殆んどが尼の着用例、その調度の用例である中で、すまにおける源氏のこの折の装束が男子表着の殆ど唯一の用例となっている。それを見、これを考えるに、源氏君の服装がこの場合青鈍でなければなら

ない事はない。一応「うちやつれた姿」として着用させているのであるが、山がつめいたゆるし色と青鈍とで、ことさらに田舎びたようすをしている姿が、宰相中将の目には、却って「見るに笑まれ^えて清らなり」と写ったのである。そうして、それも、着なした源氏君の故に、却って清新に見えたとしてよいのであろう。しかしそれだけであろうか。それは、かの楽天の青衫・青袍に通うものである事をひそかに擬しているのではないであらうか。青衫・青袍が卑官の官服である事は、余り考えられていなかったのではないか。むしろ異国情緒を感じさせる、琵琶引のあの青衫・青袍に通う青鈍である故に、源氏君はこれを着用し、宰相中将をして却って「見るに笑まれ」る清新さを感じさせたのではないかと思うのである。

なおいえば、宰相中将を訪れさせた場面の描写は、先に摘記しておいた「十年三月卅日云々」の詩題に表されている感激をそのまゝ物語の世界にもちこんでいたのであつた。宰相中将のあゝした訪問は、むしろこの詩の鬱屈気を取り込みた故でなかったかと思われるのである。

る。しかしこの事は、既に旧註の時代から云われていることなので事新らしく強調する必要はないであろう。

このようにみてくると、白樂天の側から考えるならば、源氏君の姿は白樂天の日本版である。しかし源氏物語の方から考えれば、それは唐絵の世界である。昨年度宝展に出品された教王護国寺の「山水屏風」（現在、東京博物館蔵）の絵は、竹の柱の草庵を背にした隠者めいた人物を描いているが、後の写しらしいけれども唐絵の手法であると下店静市氏は云われている（大和絵史研究）。本朝麗藻下、讃徳部、和高礼部再夢唐故白大保之作——高階積善が、白樂天の夢をみたという詩に、中書王（具平親王）と藤為時が和した詩——の、為時の詩の註記に左のようなものがある。

風姿未与影国訛
我朝□慕居易風跡
者多因屏風故云

先の山水屏風の絵が、そのまゝ白樂天であるとは云えないけれども、そのような屏風の變形と考えても、考えられるように思われないでもない。件の山水屏風の草庵は「五間四面の草堂」よりもっと簡素な作りであった。源氏君のこの時の生活が、後の絵合において、左方秋好中官方の圧倒的勝利を獲得したのであったが、それは「かかるいみじき物の上手の心の限り思ひすまして静かに画き給へるはたとうべきかたなし」と評されて「その世に心苦し悲しと思ほしし程よりも、おはしけむ有様、御心に思しけむ事ども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々の磯の隠れなく画きあらはし給へり。草の手に仮名の所々に書き交せて、まほのくはしき日記にはあらず、あはれる歌なども交れり」と説明されており、大和絵式の絵日記のようである。源氏君の描いた絵日記は大和絵様式であつたらしいが、作者が源氏君を描く時のイメージは唐絵であつたようである。たとえば教王護国寺の山水屏風が示しているようなそれと考えるならば、それは、白樂天の詩のみではなく、当時流行した彼を描いた絵画からも媒介せられたのではないかと考えられるのである。

註一、一の註に同く

この二つの覚書は、昭和三十五年十二月三日、東京女子大学比較文化研究所の公開講演で述べたものに、花房氏、布目氏の御論考をもって補わせていたものである。

また、京大における内地留学中に、啓発されるところが多くあったが、その節、御指導を賜った小川環樹博士に、心からの感謝を申し上げます。